

『お米プロジェクト』を展開している八巻正治（尚絅学院大学 教授）です。今月初旬に、第4回目となるお米の配布活動をさせていただきましたので、簡単にご報告をいたします。

今回、配布をさせていただいたお米は、栃木県那須塩原市にある、アジア学院という国際的な就農支援機関において、無農薬有機栽培で生産された、2011年度産の「こしひかり」です。そのお米（玄米300kg）が東北ヘルプを經由して、精米された状態で日本キリスト教団名取教会へと運ばれました。そしてそのお米を、名取教会の荒井牧師ご夫妻や、仙台市内のキリスト教会の信徒さんたちが多くの時間をかけ、2kgずつ丁寧に袋詰めをしてくださり、“やまちゃんサービス”に配布を託してくださったのです。その結果、これまで仮設住宅の住民さんたちに提供できたお米は500袋（1000kg）を超えました。ほんとうに感謝です。

さて、お米を配布する際に、私は毎回、必ずその目的について書かれた文書をお配りしながら口頭で説明をするようにしています。すなわち、この働きは単なる支援物資の提供ではなく、多くの方々からの寄り添い・支え合い・分かち合いの想いを、お米に託して提供する働きである、ということをお米さんたちに明確にお伝えをしたいからです。

「多くの人たちの温かな想いを、安心・安全の宮城県産米に託して、お届けします!」とのタイトルでお配りしている説明文書には、おおむね次のような内容が書かれています。

わずかな分量ですが、「やまちゃんサービス」から年金受給者、もしくは無収入状態の被災当事者さんへ2kgのお米をお届けいたします。この「愛の宅配便」は、多くの方々からの支え合いの気持ちを、お米に託してお届けしようとする活動です。

お配りしたお米は、皆さまと共に苦楽を分かち合いたいと願う組織体や、個人からの尊い支援金によって購入したものです。支援金を献げてくださったのは、お子さんからご高齢の方まで、ごく普通の市民の方々です。中には、ご自身がお病気の方もおられます。そうした方々が心を込めて献げてくださったお金によって今回、皆さまにお配りするお米を購入することができました。また、お米の元売り業者さんも卸値価格でお米を提供してくださいました。

私たちはお米の提供以上に、「お互いを思いやる気持ち」をお届けしたいと願っています。なぜなら、ひとは互いに支え合うことによって豊かな歩みを進めることができるのだと思うからです。どうかこれからも皆さまと苦楽を共にしながら歩ませてください!

ところで、「自立をしてもらうためには依存心をつけさせてはならない!」などと言う人たちがいます。しかしそれは被災当事者さんたちが有しておられる深い悲しみの現実を十分に理

解していない人の言葉です。ちなみに福祉支援の分野では、自立を「必要な支援を受けつつも、当事者ご本人による自己選択・決定に基づき、自己実現に向けてその人らしく歩んでいる状態」ととらえます。ちなみに必要な支援には、経済面・身体面・精神面が含まれます。

さて、私はいつも住民さんたちに、「最後のお一人が仮設住宅を離れるまで、皆さんと一緒にいますからね!」との言葉をかけ続けています。支援活動には継続性が何よりも大切です。支援者側の都合で安易に離脱することがあってはなりません。支援ニーズが存在するかぎり、その場に踏みとどまるのが支援活動の基本的なまなざしです。それが聖書の示す「一粒の麦」(ヨハネ福音書 12:24)であり、「一匹の羊」(ルカ福音書 15:4)の本質であると私は考えています。何より重要なのは、目の前におられる、お一人びとりの被災当事者さんであり、個々人が有する支援ニーズです。

今回の大災害で受けた深い傷は決して消し去ることはできません。消し去ろうとするのではなく、「愛」というオブラートで、その傷を幾重にも包み込んであげたいのです。そのひとつがお米の提供なのです。今回は、東北ヘルプと名取教会との連携によって実現に至った支援プロジェクトでした。そのお手伝いをさせていただいた幸いを心より感謝しています。ありがとうございました。そして変わらぬご支援を、よろしく願いいたします。